Japan Society of Obstetrics and Gynecology

16-26 一般妊婦母集団におけるマイコプラズマ属の検出頻度の検討

北海道大
片岡宙門，山田秀人，森川　守，島田茂樹，渡利道子，平山恵美，山田　俊，西田竜太郎，櫻木範明，水上尚典

【目的】マイコプラズマ感染は早産への関与が示唆されている．しかし，一般妊婦母集団における Mycoplasma genitalium, Mycoplasma hominis, Ureaplasma urealyticum, Ureaplasma parvum の4菌種の検出頻度は明らかになっていない．本研究では，これら4菌種の検出が可能な測定系を利用して，腟でのこれら4菌種の検出頻度について検討することを目的とした．【方法】妊娠10週以下の妊婦1040例を対象とした．同意を得て腟分泌物擦過物を採取し，上記4菌種の有無およびクラミジア・淋菌の有無を PCR 法により調べ，各菌の検出頻度を求めた．【成績】妊婦1040例中各菌種の陽性率は，Mycoplasma genitalium 10例（1.0%），Mycoplasma hominis 124例（11.9%），Ureaplasma urealyticum 88例（2.5%），Ureaplasma parvum 553例（53.2%），クラミジア32例（3.1%），淋菌3例（0.3%）であった．また，クラミジア陽性32例では，クラミジア陰性例に比べ，Mycoplasma genitalium（$p<0.01$），Mycoplasma hominis（$p<0.01$），Ureaplasma parvum（$p<0.01$）で検出頻度が高かった．【結論】妊娠初期におけるマイコプラズマ属4菌種の検出頻度が明らかになった．Ureaplasma urealyticum は Ureaplasma parvum に比べ，検出率が低いことがはじめて明らかとなった．クラミジア陽性例では，クラミジア陰性例に比べ，マイコプラズマ属の検出頻度が高かった．現在さらにこれらマイコプラズマ属ならびにクラミジアおよび淋菌の保菌と妊娠予後について検討中である．

16-27 PCR による妊婦頚管粘液中のウレアプラズマ検出と切迫早産・前期破水との関連

鳥取大
出浦伊万里，光成匡博，吉田壮一，堀江さや子，月原　悟，入江　隆，寺川直樹

【目的】切迫早産や前期破水の誘因として上行性感染による絨毛膜羊膜炎が注目されている．しかしながら，従来の一般細菌培養検査やクラミジア抗原の検索では起炎菌が同定されない例も多い．近年，泌尿生殖器に常在するウレアプラズマと早産や絨毛膜羊膜炎との関連が指摘されている．本研究では，従来の検査で起炎菌不明とされた切迫早産・前期破水とウレアプラズマ感染の関連を検討した．【方法】同意の得られた妊婦129例のうち，lactobacillus 属を除く一般細菌とクラミジアがともに陰性であった78例を対象とした．切迫早産・前期破水群（Tocolysis index≧3）23例と対照群（Tocolysis index≦2）55例の間でウレアプラズマ感染率を比較検討した．ウレアプラズマは子宮頚管粘液から DNA を抽出し，PCR により検索した．【成績】ウレアプラズマ陽性率は対照群で44%（24/55）であったのに対し，切迫早産・前期破水群では87%（20/23）と有意に高率であった．ウレアプラズマ陽性群（44例）の早産率は38%であり，陰性群（34例）の12%に比して有意に高かった．組織学的に絨毛膜羊膜炎と診断された早産症例の羊膜と絨毛脱落膜において，ウレアプラズマの存在が確認された．マクロライド系抗生剤による治療の前後で子宮頚管粘液を採取し得た5症例のうち，4症例でウレアプラズマ DNA 量の減少を認めた．【結論】従来の検査では起炎菌不明とされた切迫早産・前期破水症例において，ウレアプラズマ感染の関与が示されるとともにマクロライド系抗生剤による治療の可能性が示唆された．

16-28 当院の妊婦外来における *Chlamydia trachomatis* 感染の現況

愛知医大
藤田　将，野口靖之，野口昌良

【目的】妊娠中の STD について特に *Chlamydia trachomatis* 感染症について，その実態を把握する．【方法】妊婦外来に置いて述べ942人の妊婦を対象に *Chlamydia trachomatis*，梅毒，B 型肝炎 C 型肝炎，HIV の陽性率を調査した．またこれら以外にも診断に至った症例をこれに加えた．*Chlamydia trachomatis* に関しては妊娠初期および後期の二回にわたり検査を実施した．陽性となった妊婦集団において年令，流産歴，切迫流早産の有無，喫煙歴を陰性妊婦集団と比較した．【成績】942症例のうち53症例（5.6%）が何らかの STD を有した．38症例（71.7%）が *Chlamydia trachomatis* 感染症，9症例（17.0%）が B 型肝炎，8症例（5.7%）がヘルペス外陰炎，2症例（3.8%）が C 型肝炎，1症例（1.9%）が梅毒，1症例（1.9%）が尖圭コンジロームであった．*Chlamydia trachomatis* に注目すると，年令別では年令が低下するにしたがって陽性率が上昇した．また初期の検査では陰性であった症例が後期の検査では陽性となった例が10.5%に認められ，妊娠中に感染した *Chlamydia trachomatis* の実態が明らかになった．【結論】*Chlamydia trachomatis* 感染による流早産や垂直感染を防止するために，妊娠中二回の *Chlamydia trachomatis* 検査が有用であると思われた．

NII-Electronic Library Service